

日本を愛したヒコ ジョセフ・ヒコ

この物語の主人公は浜田彦蔵といえます。

瀬戸内海に面した播磨国加古郡古宮（現在の播磨町）の農家に一八三七（天保八）年に生まれました。幼いころに父を、十三才の時に母を亡くしました。

母が死んだその年の秋、彦蔵は栄力丸という船に乗り江戸に向かっていました。ところが江戸からの帰路、紀伊半島の大王崎のおきであらしにあって船は難破、五十二日もの間、ひょう流したのです。幸い、南鳥島の近くでアメリカの商船オークランド号に救助されました。そして、助けられた船員とともに、彦蔵はサンフランシスコへ向かったのです。

彦蔵がアメリカに着いたのは、ペリーの黒船が浦賀おきに姿を現す前々年の一八五一（嘉永四）年。日本は世界の国々から開国をせまられていました。しかし、鎖国は続き、キリスト教も厳しく禁止している状況ようでした。外国へ行くことも許されず、ひょう流して外国からもどつた者は厳しく取り調べられ、かん視されるといふ世の中でした。まだまだ、世界からはこ立した島国だったのです。

彦蔵はとう着したサンフランシスコで、日本では考えもおよばないような文明の進歩を目の当たりにします。

「これは、わいらの国とはえらいちがいや。」

レンガ造りのがんじょうな建物、たくさんの商品が並ぶ店、町を歩く人々の姿、なにもかもが彦蔵にとっておどろきで、まるでりゅう宮城に連れてこられたような気分でした。

翌年、彦蔵にアメリカのはからいで日本に帰る機会が訪れ、香港まで船で向かいました。ペリーの黒船に乗って日本に帰国する予定だったのです。ところが、その船がなかなかやってきません。そのうち、自分がアメリカに、日本との外交しようの材料に使われるのではないかという疑念をいだきます。彦蔵は帰国を取りやめ、アメリカに引き返したのです。

再びサンフランシスコで暮らしていた彦蔵は、ニューヨークに移り住みます。一八五三（嘉永六）年、日本人として初めてアメリカ大統領に面会しました。翌年、知り合った人々の好意でボルティモアのミッション・スクールに入学し、教育を受けます。その後、キリスト教の洗礼を受け、ジョセフ・ヒコと名前を改めました。

一八五八（安政五）年、アメリカと日本との間で修好通商条約が結ばれました。日本とアメリカとの関係を知ったヒコは、日本へ帰りたいという思いが再びわき上がってきました。

しかし、キリスト教徒となった自分が、キリスト教を禁じている日本へもどることなどできないということは、だれよりもかれ自身が知っていました。ヒコはアメリカ国民となって生きる道を選び、帰化しました。ジョセフ・ヒコ、二十才のときでした。

とはいっても、日本が自分の故国であることに変わりはありません。望郷への思いは、それからもつのるばかりでした。アメリカ人となり、ジョセフ・ヒコと名前が変わっても「日本人の心」が消え失せることなど、ありはしませんでした。

そのヒコに思いがけない知らせが入ります。日本に派けんされている公使ハリスが、ヒコを神奈川領事館の通訳として採用するというのです。ヒコは長崎を経由して神奈川にふ任しました。九年ぶりに故国の土をふんだのです。

しかし、久しぶりに見た日本の社会にヒコはおどろきました。

「外国の進歩に比べて、これはなんや。この国は世界から取り残されてしまうぞ。」

開国とは名ばかりで、人々の暮らしは以前のままでした。そればかりか、外国人に対する暴行がひんばんに起きています。外国人を見たら殺害しようとかくらむ者も、たくさんいました。アメリカ人となり領事館で働くヒコも他人事ではありません。我が身に危害が加えられる可能性があります。身の危険を感じながら、日本を案ずる日が続きました。しかし、世は幕末の尊王攘夷の機運が高まる中、いよいよ身に危険がせまり、ヒコは日本をはなれる決心をします。

「きつとまた、ここにもどってくる……。」

アメリカ国民のヒコにとって日本は異国でした。しかし、次第に小さくなる日本の岸を船上から見つめ、「この国をなんとかしなくてはならない……。」という、あせりにも似た強い思いが胸のおくからつき上げてくるのを、ヒコはおさえることができませんでした。

アメリカにもどったヒコは、あの日本のなげかわしい状況ようが脳裏からはなれません。このままでは、日本は世界からどんどん見放されていく。戦争でも仕かけられたら大変なことになるだろう。人も国も、日本のすべてが目覚めなくてはいけない。そう思うヒコでした。

帰国の翌年、ヒコはリンカーン大統領と会える機会にめぐまれました。日本では、しよ民が將軍と面会することなど考えられません。

すでにヒコが会った大統領は、リンカーンで三人目でした。

ことあるごとに日本とのちがいを思い知らされるヒコは、考えました。

「どうすれば日本は生まれ変わるだろうか。何が、日本を変えるきっかけになるのだろうか。」アメリカにいても、やはりヒコは、故国日本の行く末に大きな不安をいだき続けていたのです。そんなある日、町で新聞売りを見かけました。

ヒコは早速その新聞を一部買い求め、読んでみました。リンカーン大統領の演説も記事になっています。人々はそれを食い入るようにして読んでいます。

「これだ！」

それは、だれもが世の中の出来事を知ることができる社会の光景でした。これこそが日本を目覚めさせる「何か」ではないか。

ヒコは、ひらめき、しばらくの間、新聞を読みふける人々の姿に見入っていました。

リンカーンに会ったその年、再び日本へ行く機会がやってきました。ヒコは、今度こそ故国の役に立つことをしようと、強く心に決め、再び領事館にふ任しました。

しかし、ヒコが目にした日本では、イギリス人が殺害されたり、外国の商船がほうげきされたりと、相変わらず混乱が続いていました。以前と同じように、自分の身が危険にさらされること

もたびたびありました、しかし、今度は簡単にアメリカにもどるわけにはいきません。ヒコには心に秘めたある決意があったからです。

「アメリカの出来事や、世界の動きを正確に日本の人たちに伝えなければ、この国はだめになってしまう。伝えることができるのは、異国で暮らしてきた私しかない。」

その思いを胸にいだいていたヒコは、一年後、領事館通訳を辞め、外国人居留地でアメリカやイギリスのニュースを記事にした新聞の発行に向けて活動を始めました。

しかし、アメリカで教育を受けたヒコは、日本語を話すことができて、日本語の文章を書くことが苦手でした。どうしたらよいかと思案しているところへ、ヒコが語る言葉を文章にするという協力者が現れました。ヒコのもとで英語を学んでいた岸田吟香たちです。ヒコは、岸田らの協力を得て、外国新聞をほん訳する「海外新聞」を創刊しました。

「これで、日本人は異国の出来事を知り、そして、きっと目覚めるはずだ。」

ヒコはでき上がった新聞を、感じが深く見つめていました。

一八六四（元治元）年六月。ヒコが手にしたその新聞は、定期的に発行された日本最初の新聞でした。

初めのこう読者はたったの四人でした。それでもヒコは、海外のニュースやめずらしい出来事を記事にして無料で配りました。「海外新聞」は筆写され、たくさんの人たちの手にわたるようにもなりました。ヒコは、新聞の発行が人々の考え方にいきょうをおよぼす手応えを感じていました。これは、世の中を変える大きなきっかけになると、改めて強く感じました。

「きっと、日本は変わるにちがいない。」

新聞を読む人たちの姿が、アメリカの街角で見たあの日の光景と重なり、ヒコの全身に熱いものがこみ上げてくるのでした。

一八六八年、ヒコは十八年ぶりに故郷の播磨にもどりました。明治元年のことでした。

ヒコはその後にも日本に残り、アメリカでの経験を生かして、新しい社会づくりにこうけんする仕事を続けました。

だれよりも「日本人の心」をもち続けたアメリカ人、ジョセフ・ヒコは、一八九七（明治三十年、東京の自宅で亡くなりました）

今は、東京青山の外国人墓地で永いねむりについています。